

ホトトギス

六月号

ホトトギス

昭和二十三年六月二十一日発行
昭和二十三年六月一日発行
昭和二十三年六月一日発行
昭和二十三年六月一日発行



風雅の小筥（六十四）

廣太郎

結局東銀ビルには平成八年から十年程居る事になる。その最後の平成十八年であったか、その少し前だったかは記憶が曖昧であるが、平日の昼間に、この東銀ビルが全館停電するという事故が起ったのである。私も勿論この時はホトトギス社に出社しており、記憶によると近隣で用を済ませてこのビルに帰ってくる時、エレベーターが止まっており、この頃は結構私は太っていたのだが、階段を喘ぎながら五階の事務所へ戻ったところ「エレベーターに閉じ込められなかつたですか」

という社員の言葉で、事の重大さを知るところとなった。その時止っていたエレベーターの中には閉じ込められていた人が多く居られて、正に救助作業が行われていた。事務所内では勿論電灯は消えているが、当時の事務所窓は大きく、昼間の太陽で暗さは感じられなかつた覚えている。そしてデスクの上のパソコンは暫く作動していたが、時間が経つと画面が消えて作動しなくなつた。電話も暫くは通じていたが、その内不通となつてしまつた。その内遠くからサイレンが聞えて来て、何故か消防車がビルの前に横付けされたのである。前後してビル側から無緊急放送のアナウンスが流れ、火事などの緊急を要する事故ではないので、避難などをする必要は無いとの事だったので、そのまま電気が復旧するのを待ち、その後二時間ほどで復旧したように記憶している。エレベーターに閉じ込められた人も無事救出されたが、やはりこの人達は、狭い場所での恐怖感もあり一番気の毒であつたのではないだろうか。

旬日記 廣太郎

令和四年六月二日 カトリック新聞選者吟

葉桜を愛でることなく逝きし人

六月一日 NHK文化センター

紫は日にも濡れ色花菖蒲
明易や牛乳瓶の音軽し
摩天楼底に蠢く蟻の道
一丁目二丁目抜けて風薫る

六月二日 蕉心会

草茂る園丁の手を逃れつつ
今日よりは半額入園料涼し
長々と亀首伸ばす薫風裡
蒼天に整へられてゆく緑
万緑の色の濃淡風が解く
木下闇石仏群の祈りかな
花菖蒲白と紫競はざる
蕉像と薫風分ち合ふ縁
六月三日 六甲会
蛇を見て蛇に見られて寿
主逝き青大将の統ぶる庭

汀子邸青大将も喪に服す
夏帽を取りて追悼ミサの席

くちなはに狭められたる子等の列

蛇逃げる聖母に踏まれたくなくて

夏帽を振り護衛艦出港す

虚子館の蛇と思へば愛しかり

夏帽子整列大和上甲板

六月四日 芦屋ホトギス会

明易や遺品整理に時忘れ
汀子邸庭師の技に草を引く
水の失せ子等失せ夏の芦屋川
天国の君に見せたく合歓咲けり

六月五日 青風会芦屋例会

源五郎サンダーバード二号めき
源五郎水の固さを解きゆく
恋芽生えたる青桐に見下され

六月九日 土筆会

汀子邸人を拒みて五月闇
咲くものに払はれてゆく五月闇
江戸の世を知る水草の花の黙
住む人の絶えぬの香を纏ふ家

花菖蒲愛でるは人のみにあらず

六月十日 工業倶楽部

みよし野の夜を灯して著莪疊
街出水屋根点々と見え隠れ
形より味楽しめと鮎の膳

六月十三日 朝日カルチャー若草句会

時鳥 山湖に響く静寂かな
曇天に色解けゆく花菖蒲
遠山に筈返して時鳥
玉葱を刻み厨の動き出す
玉葱を剥けば故郷香り来る
山莊を手放す話時鳥

六月十四日 大阪倶楽部選者吟

父の日や母も納まる父の墓
河鹿鳴くデュエットトリオカルテット
父母の墓供華新しく風薫る
河鹿笛六甲に夕暮引き寄せて
河鹿鳴く瀬音のオブリガードかな
草引いて八十年の歴史閉づ

六月十四日 北國文芸選者吟

六月十五日 きさらぎ会

墓守のやうに猫居る五月闌

虚子館の未央柳に過去を捨て
日差皆未央柳に弾かるる
五月闌 運転免許証遺し
潮風に未央柳の蕊舞へり

六月十六日 内田進、泰代様夫婦句集序句

二筋の航跡永久に月涼し
六月十六日 前議員句会

十葉の香より始まる散歩道
苔の花古刹の庭の華やげり
雨蛙葉裏に色を明かさざる

六月十六日 登高会

山深く蟪蛄生る静寂かな
夏帽子華やぐ銀座四丁目
心まで染め上げられて紅の花
遺されし夏帽虚子と旅せし日
冠の如紅花の主張かな

六月十七日 廣邦会

青嵐目覚めさせたる森の精
夏暖簾君の残り香ほのと立て
波頭青く染め上げ青嵐

六月二十二日 目黒学園句会

菫 實 茶 屋 屋 酒 に 酔 ふ 佳 人 かな
で で む しの 伸 び 切 つ て ゐ る 葉 裏 かな
菫 實 茶 屋 潮 騒 透 け て を り に け り
玉 葱 の 収 穫 に 島 躍 り 初 む
玉 葱 を 吊 り て 昭 和 を 生 き 抜 き し
蝸 牛 家 を 手 放 す 話 な ど

六月二十六日 日本伝統俳句協会総会及び汀子追悼会

天 国 の 門 は 涼 し く 開 か れ て

六月二十六日 青嵐会東京例会選者吟

鮎 抱 く 百 万 石 の 海 深 し
菫 の 舞 未 央 柳 と 判 る ま で
夏 帽 を 胸 に 棺 の 閉 ぢ ら る
細 波 を 尖 ら せ て ゐ る 青 嵐
夏 暖 簾 吊 れ ば 悌 蘇 る

六月二十八日 若水句会

枇 杷 熟 れ て 山 の 消 息 語 り 初 む
夏 蒲 団 極 彩 色 の 夢 の 中
青 嵐 庭 の 歳 月 明 か し ゆ く
青 嵐 国 生 み の 島 持 ち 上 げ て
枇 杷 睨 る 君 の 悌 追 ひ な が ら

六月二十九日 NHK文化センター

網 戸 から 漏 れ くる 山 の 靈 気 かな
絵 日 傘 に 色 足 さ れ ゆ く 都 心 かな
汗 引 い て よ り の 句 心 旅 心
噴 水 に 公 園 の 朝 始 ま れ る

雑詠 廣太郎 選

寒の水供へ火の神酒の神 奈良 古賀しぐれ
 酒蔵の濡れ通しなる寒の土間 同
 醪つぶやき酒蔵の寒明くる 同
 風花の美し海の街なればなほ 神戸 和田華凜
 寒紅をさす別れ告ぐその前に 同
 新生児指まだ解かず露の臺 同
 冬日向集まつて来る靴の音 横浜 小川みゆき
 静かさに淋しさありて実むらさき 同
 夫と来し道はこの道落葉舞ふ 同
 なつかしき夢を見てをり春の風邪 京都 山崎貴子
 日当れば早春の色見せし山 同
 早春や器を一つ新しく 同
 葉桜やさみしき風をやり過ぐす 東京 今井肖子
 みよしのの遙けき空よ若葉風 同
 夏の月仰ぎ悌仰ぎけり 同
 躓いて放つあぶくや芹の水 香川 湯川 雅
 爪先の遊ぶ水辺や春隣 同
 霞へともぐり込んで沖となる 同

凍蝶といふ瑠璃色の塵を掃く 神戸 藤井啓子
 寒明やこころの鍵をすこし開け 同
 早春の風の軽さのベレー帽 同
 酒の味戻りて春の風邪抜けし 香川 三宅久美子
 光織り込み早春の風となる 同
 胸で切る風早春のものなれば 同
 春近し木々は日ざしを分かちあひ 龍ヶ崎 今橋眞理子
 尖りたるものを蔵して春の土 同
 庭つつみきれざるままに春の雪 同
 傀儡師くぐつ寝かせてとる昼餉 東京 田丸千種
 傀儡師荷よりとり出す小さき莫塵 同
 手毬つく浪花ことばのやはらかく 同
 人日や風呂敷包みより銘酒 神戸 山田佳乃
 松の内神鈴のごと猫の鈴 同
 野老祝ふ家系図に名を書き足して 同
 灰と紅ふふみ咲き継ぐ冬桜 同 涌羅由美
 ほろほろと日差にこぼれ冬桜 同
 火の神に風神従きしとんど焼 同
 歳月を刻む諸手に屠蘇一を受く 袋井 湖東紀子
 夜々うるむ星を見上げて春隣 同
 竜の玉こぼれ日差と出会ひたる 同
 凍蝶や風なき庭にある薄日 長岡 安原 葉
 悲しみを秘めてかがやく冬の星 同
 贈られしポインセチアに寓居栄ゆ 同

雑詠句評（五月号より）

街中が歌街中がクリスマス

袋井

湖東紀子

クリスマス・キリストの降誕を祝う十二月二十五日。クリスマスが近づくと街中がクリスマスカラーの赤・緑、一色に彩られ、まさにこの句の通り、ジングルベル等のクリスマスソングが流れ沸き立つ。

街中がクリスマスの措辞が効いている。（とほ歩）

日本はキリスト教があまり普及しているとは言えないが、十二月になると、街中はクリスマスの華やぎ一色となる。キリストの誕生を厳かに迎えるというのは程遠いが、お祭りとして大いに盛り上がるのはやはり楽しいものである。（廣太郎）

夫の手で解かれてゆく悴かむ手

テマリ

丸谷瑞理

一体どんな状況なのか、この一句では分からない。この句のままだと、これは一般には、夫の大きな手が妻の悴かむ手を解いてくれたという、愛情のこもった一句。しかし、もしこの句が生死にかかわる句で妻の死の「悴む手」の指を一本一本解いてゆく句だとすれば、これは祈りにも似た鎮魂歌である。いずれにせよ「悴む」の季題はとても重いが、この一句だけでは、この句の情景がわからない。（中正）

作者は長年アメリカでお過ごしの方である。最初アメリカで暮らすようになった時は色々戸惑いもあっただろう。しかし今ではその違いを楽しみながら現地の季題を詠んでおられる。悴みも日本とは違うのかも知れない。（廣太郎）

落選の陶持ち帰る秋の風

渋川

木暮陶句郎

陶器は買って使うものとする私とは、別の関りもある。句の作者は作陶してそれを出品する人だ。出品すれば、当選することもあるし、落選することもある。私たちが普段目にするのは、当選の作品だろう。一方で、落選の作品ももちろん世の中にはある。そちらの方が多いかも知れない。陶器の少しざらついた表面と、

それを持つ作者の手元を秋の風が吹いていく。(敦子)

陶芸のコンクールというのがあるのかどうかは知らないが、何かの賞に落選してしまったのである。自信作だったのかも知れないが、それを持ち帰る時の気持が季節によって見事に語られている。次への希望も見取れる。(廣太郎)

初春や母となる娘をうち囲み

龍ヶ崎

今橋眞理子

「初春」(はつはる) 新年の事である。旧暦では新年即ち初春であった。新暦が採用されてからもその習慣が残ったものである。「初春…しよしゅん」と読むと春の季節となる。

掲句は、「母となる娘」と言っている。新年を迎え、産み月を迎えた娘である。更に「うち囲み」と言っている。接頭語の「うち」に切羽詰まった状況が想像される。既に陣痛が始まった娘を取り囲み心配している家族である。想定内のことであるとは言えないざとなると心配は尽きないものである。

始めに掲句を読んだ時「うち囲み」は「取り囲み」ではないかと疑問を抱いた。接頭語「うち」の強さに違和感を覚えたのである。暫くして敢て「うち囲み」と詠んだ状況に思いを巡らせた結果、前述の解釈となった。一語一語を吟味する大切さを思い知らされた。嘗て筆者の初孫も正月五日に生れた。(青天子)

娘さんが身籠られたのである。母とすればもう直ぐ孫が誕生す

る事へのこの上も無い喜びと、少しの心配もあるだろう。そして母だけでは無く家族でその娘さんを囲んで団欒をしているのである。何とも仄々とした景である。(廣太郎)

片時雨夕日の街の欠けゆる

八千代

岡田順子

初冬のころの時雨、それも一方では晴れていながら一方では時雨れているという片時雨が詠まれた句である。作者は夕日の街を見下ろせる高みにあって街を眺めているのであろう。折からの片時雨が渡って行く夕日の街の情景を、夕日の街が欠けてゆく、と詠まれたことよって、印象鮮明な句になったと思う。(葉)

時雨というのは結構神秘的で、微妙な雨量がざつと降って暫くすると一気に止んだり、遠方が晴れていたりする。この句の片時雨の景も西には夕日が輝いている中の雨である。この様子が街の輪郭を通して見事に叙せられている。(廣太郎)